The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ゲーム読み物

ソニックの大冒険

▲モニカ　▲エミー　▲パティ

第4章 Dr.エッグマン、現る！

星のきれいな夜のことです。

ニッキのクラスメート、エミーの家の中庭では、彼女のバースディ・パーティーが開かれていました。

エミーの家は、ピーヒョロ山のちょうど真ん中あたり。

庭からは、小学校のあるヘッジホッグ・タウンやヘッジホッグ湖を見下ろせて、それはそれは、もうバツグンの景色です。

いつもおしゃれなエミーは、この日もバ〜ッチリ！男の子たちの注目のマトです。

「うふっ、お兄ちゃんたら。さっきから、エミーさんのことボ〜ッと見てばっかり。」

おませなタニアが、ニッキのわき腹をつつきました。

「ちぇ、何言ってんだよ。そんなことないってば。」

ニッキが、あわててタニアの口をふさぎます。

ホントのところは、タニアの言うとおり。

まっ白なドレスのエミー。とてもかわいらしくって、ニッキは、なんだか胸がキュンとなってしまったくらいです。

ところが、エミーのほうは、もう、おしゃべりに夢中！

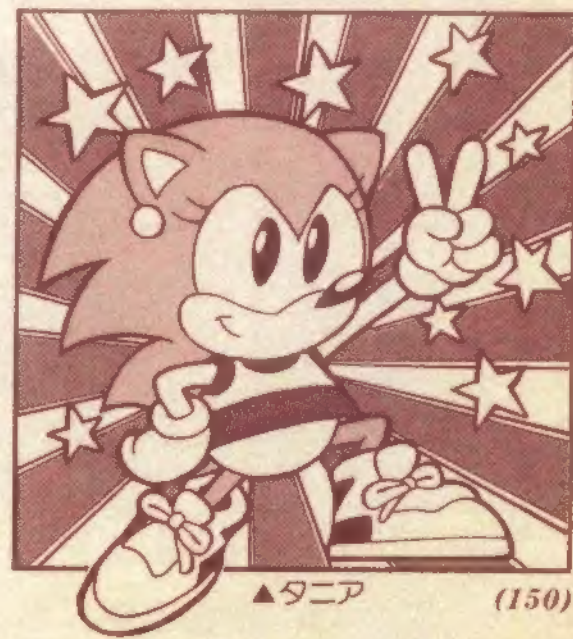
男の子たちのアツ〜イ視線なんか、まるで目に入らない、っていう感じです。

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

◆今月から新しいお話がスタート。どんな冒険が始まるのかな？

それも、仲良しのパティとモニカがいっしょでは、ムリもありません。この三人、学校でもピーチクパーチク、ホントしょっちゅうおしゃべりに熱中しているのですから。
なんていっても一番のおしゃべりは、パティ。
『情報屋』というアダ名があるように、好奇心バツグン、なんだって知ってます。ある時なんか、学校中の先生のランチ・メニューを全部ピタリと当てちゃったほどです。
早口でペラペラとやかましい彼女と違って、モニカのほうは、ちょっと変わっています。
どう変わってるかって？
とにかく、メチャクチャにクラ〜イことを言っては、エミーたちを笑わせるのです。

▲ニッキ

クライことを言って笑わせるっていうのも、ちょっとヘンな気がするでしょうけど、ギャグになっちゃうくらい、セーカクがクライのです。
何て言ったって、よ〜く眠った気持ちのいい朝でも、
「ああ疲れたぁ。これでまた一日、死ぬ日に近づいたのね。」
と、ため息をついて、ママを「のわ〜！」ってズッコケさせるくらいなのです。
「ねえねえ、ニッキ。ホントにホントに、何も覚えてないのぉ？」
パティとモニカが、エミーを引っ張るようにして来て言いました。
「え？　な、何がだい？」
いきなり！
とつぜん！
ボワ〜ッと見ていたエミーが、すぐ目の前に来たもんですから、ニッキは、ちょっとあせりました。
それで、まったくドジなことに。
エミーの家に来た時、とっくに言った言葉をもう一度言ってしまいました。
「や、やぁ、エミー。ハッピー・バースディ！」
そのため、「おわ〜！」パティやタニアが、ドドドッとズッコケました。
「ちがうでしょちがうでしょ！ニッキ君！ほら、君たちが助けてもらった、っていうソニック・ザ・ヘッジホッグのこと！カレのことを聞いてんの。」
パティが、ぐんぐんつめ寄ってきます。
「ソニック？」
ニッキは、思わず目を点にしました。
もちろん、その名前は覚えています。でもまさか、こんなに早くウワサになるとは思わなかったのです。
ウワサを広めた犯人はだれか決まってます。
「タニア、もうエミーたちにしゃべったのかい？」
タニアは、ぺろっと舌を出すと、ソニックが登場した時のマネをしてみせました。
「オレか？　……オレの名は、光速を超えたニクイやつ、ソニック・ザ・ヘッジホッグってんだ！　ドッカ〜ン！」

▲タニア

これにはみんな、どどぉ〜っと拍手です。

どうやら、タニアは、この間のホッグホッグ島で起こったことを、パーティーの間、ペラペラおもしろおかしくしゃべったに決まってます。

「すぅ〜っごくカッコイイんだってね、その人ォ？　ど〜して、ニッキったら、な〜にも覚えてないのかしら？」

と、エミーが目をパチクリしてニッキの顔をのぞきこみます。

「う、うう〜ん……。」

ニッキは、ただただ、うなるばかり。

エミーの言うとおりに、ホント、マジ、カンペキに覚えていないんだから、ムリもありません。

「わかった……。」

すると、モニカがクラーイ声を出して言いました。

「きっと、ニッキの前世は、クラゲだったのよ。」

「クラゲ？」

エミーが、目を丸くして聞き返しました。

「だからぁ、……ニッキは、海に落ちると突然、クラゲに戻っちゃうの。目の前で何が起こっても、た〜だプ〜カリプ〜カリ漂ってる、ク・ラ・ゲ……。」

エミーとパティが、思わず声をそろえて言いました。

「クッラ〜イ！」

「ちょっと、やめてよ。みんなぁ〜！」

エミーたちは、あわてるニッキに声をあげて笑いだしました。

〜と、その時！

「あっ！　おっきなシャーベットのかたまりが降ってくる！」

盛りだくさんのデザートの前で、リトル・ジョンが、上を見て叫びました。

食いしんぼうの彼は、おしゃべりにもかわいいエミーにもいっさいキョーミがありません。

た〜だひたすら、デザートの山を夢中になって平らげようとしていたのです。

▲リトル・ジョン

その彼が、夜空を見上げて、シャーベットが降ってくる、って叫んでいるのです。

「やだ、リトル・ジョン。ついにオカシクなっちゃったのかしらぁ？」

「やぁ〜ね、パティったら。」

エミーが、そう言って、パティと笑いだしました。

「ちょっと、待って！」

ニッキが、エミーたちを手で制しました。

「あ、あれは、なんだ？　シャーベットじゃないけど。……流れ星？」

「ええ？」

そうです。ニッキたちは、空から、大きな大きな光のかたまりが降ってくるのを見たの

です。

でも、光に当たってキラキラと光ってるシャーベット、っていうにも。流れ星、っていうにも。どっちにしても、大きすぎます。

「な、なんだろう?」

中庭にいる子供たち全員、これ以上開けられないっていうぐらいの目をして、光のかたまりが落ちていくのを見守りました。

すると、ドドーン！ 光のかたまりは、ついにヘッジホッグ・タウンのはずれにおっこちたのでした。

しかも！ あの辺りは、みんなにとってとっても大切なところ。

「学校だ！ 学校に落ちたぞ！」

子供たちは、ピーヒョロ山を転げるようにして、大急ぎで学校まで駆け出していきました。

おデブのひとだま?

ニッキたちが、ヘッジホッグ小学校にたどり着くと、そこはもうすでに、大騒ぎ。

あの巨大な光のかたまりを見たのは、ニッキたちだけではなかったのです。宅配ピザ屋のお兄さんや、近所のおばさんなんかがつめかけています。

でも。

ところが。

まったくフシギなことに、学校のどこを見ても、光のかたまりが落ちた跡が見つからなかったのです。

「おっかしいな。たしかに、このあたりに落ちたよねぇ。」

ニッキが、エミーに言いました。

「やだ……。なんだか、わたし、こわくなってきちゃったぁ。」

エミーは、パーティーの時とはうって変わって、ちょっと震えてる感じです。

「宇宙人かしら！」

突然、パティが、大きな声を出しました。

「まさか。地球以外で、あんなおいしそうに光るモンが、降ってくるもんか。」

「あのねぇ、リトル・ジョン。あんたは、こういう時、黙ってればいいの！」

するとモニカが、

「わかったわ！」

またまた、クラ〜イ感じに言いました。

「きっと、……あれは。人魂っていうやつよ。」

「ひ、ひとだまぁ?」

と、タニア。

「ええ……。死んだ人の魂が、夜になるとふらふらふらぁ〜、って飛ぶことがあるの。それが、人魂。」

「ドキン！」

タニアが、あわててニッキの陰に隠れます。

「そうよ……。そしてあれは、人魂のリトル・ジョン！」

「な、なんで、ボクなのよ?」

「つまり……！」

こうなると、モニカの言うことには、熱がこもるというか、なんていうか、とにかくみんな『ホントかなぁ〜?』という気分にさせられるからフシギです。

みんな、モニカのほうに頭を集合させて次の言葉を待ちました。

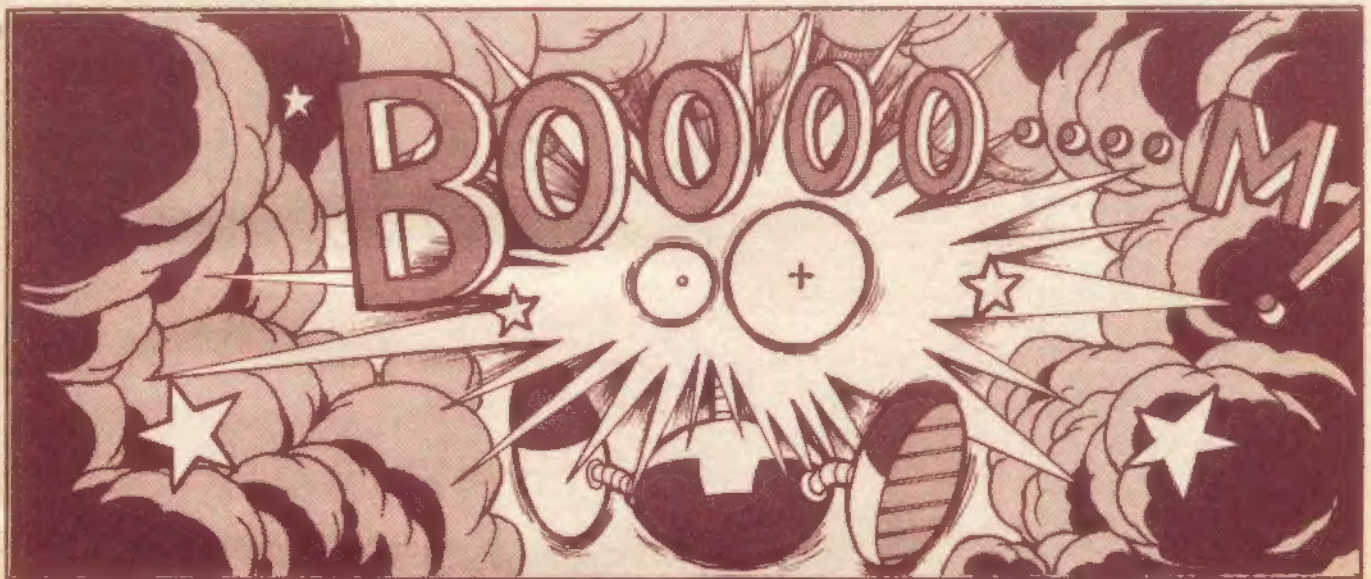
「つまり……！ 人魂の肥満児よ！ おデブ

ちゃん！　まちがいないわ！」
「シラ〜ッ！」
今度は、全員が、「クラ〜イ！」ではなく、そう言って、思いっきりシラケたのでした。
そして、それがキッカケで、みんなそれぞれ帰ることになりました。
バースティ・パーティーも、もう終わりにしなくちゃいけない時間だったのです。
「おやすみ、エミー！」
「おやすみ、ニッキ。」
ニッキは、エミーに手を振ってお別れを言いました。
その時の、エミーのニッコリと笑った顔ったら。
ホント！　かわいいったらありません。
それでニッキは、すっかりうれしくなっちゃって、この巨大な光のかたまりのことをすぐに忘れてしまったのです。
と・こ・ろ・が！

あやしいふたり

ボコッ！
ニッキたちがいなくなるとすぐに、校庭の真ん中の土が、もっこりと浮かび上がりました。
そして、土の中から、ちょうど潜水艦の潜望鏡のようなメカの目が出てきて、うす暗い庭をキョロキョロと見回し始めたのです。
さらに、土の中で、こんな声がします。
「どだ？　一般ピープルどもは、消えおったか？」
「だなや、オッサン！」
次のしゅんかん、グオ〜ッ！　校庭の土が大きく大きく盛り上がったと思うと、巨大なタマゴがはい出てきたのでした。
それと同時に、
「のはぁ〜！」
そのタマゴの上に乗っかっていた、やはりコロコロと丸っこい小さなメカが、そう叫んですべり落ちました。
この丸っこいのが、潜望鏡のように伸びちぢみする目をもっていたのです。
そしてそして、その丸っこいのに向かって、

▲オムレッツ　▲エッグマン

なぜか巨大タマゴが、こんなふうにどなったのでした。
「こら〜っ！　オッサンとはなんだ、オッサンとは！　ドクターと言えと言っただろうが、ドクターと！」
丸っこいメカは、べつにあわてることもなく、ポリポリと頭をかいて、「だなや、ドクター……。」
と、言いました。
「よし、それでこそ、今世紀最強の天才科学者ドクター・エッグマンの発明した『メカ生んじゃったメカ』、オムレッツじゃ。」
「だなや。」
オムレッツと呼ばれたメカは、ちょっとテレくさそうに頭をかいて、巨大タマゴの腹のトビラを開きました。
はたして、そこには！
またまたタマゴ、……いや、タマゴにそっくりの人間が、立っていたのでした。
「ふふふ……、我こそは、ドクター・エッグマン。まだまだ、一般ピープルにどうどうと名乗ってあげられんのが、ザンネンでならんて。」
そして、この男こそ、あの光速を超えた少年、ソニック・ザ・ヘッジホッグの秘密のパワーを追ってやって来た科学者だったのです。
（いやホントホント……。ただし、天才かどうかは、わからないけど）
「におう！　におうぞ、オムレッツ。」

「だなや？」
「〈超光速エネルギー〉が、この町のどこかにひそんでいる。このわしが、にらんだとおりだ。ふわ〜、はっははは〜〜〜」
ププププッ・・・！
エッグマンは、笑うと同時にオナラをするというクセがあります。
うす暗い校庭に、エッグマンの無気味な笑い声とともに、黄色い煙が立ち込めていきました。
「オッサン、カンベンだわ。」
思わず、そう口をすべらせてしまったオムレッツ。
「こらぁ〜！　ドクターと言わんかドクターとぉ！」
コンコン！
エッグマンは、またまた怒って、持っていたステッキでオムレッツの頭のテッペンをたたきました。でも、そのしゅんかん、
「おわ〜っと、いかんいかん！　こ、このわしとしたことが！」
ドクターは、あわててステッキをおさめました。でも、もう遅かったのです。
「う〜〜〜ららら〜〜〜！」
頭のてっぺんをたたかれたオムレッツ。するとなぜか、全身がみるみるうちに赤くなっていきました。
そして、ぶるぶる〜〜〜〜！　いきばってる感じに、体をふるわせ始めたのでした。

そしてそして、
「オ〜メデタ〜ッ！」
いきなりおなかのフタが開くと、ポコン！
なんとなんと、自分より小さなメカを生み出したのです。
「あちゃぁぁ〜〜〜！」
エッグマンが、悲鳴をあげました。
そうです。
オムレッツは、ドクターの数かずの発明品の中でも最高ケッサク。なんたって、『メカ生んじゃったメカ』なのです。
頭のてっぺんをたたくと、いろんなメカを生み出す仕掛けになっていたのでした。
「オムレッツよ。い、いったい、ナニ生んじゃったんだぁ？」
エッグマンは、オムレッツの生んだメカをこわごわと見て、「ひぃ！」と引きつりました。
「げげっ、それは、〈ボッカン〉ではないか！」
ウンチャ・・ウンチャ・・ウンチャ・・。
ボッカンと呼ばれたメカは、そんな音を立てて、エッグマンのほうに向かっていきます。
ひょろひょろと伸びた首に、頭が重そうにのっています。それが、右へ左へフ〜ラフラ。
「うわ〜〜〜、わしのほうに来るな！　来るんじゃなぁ〜い！」
「ムリ、だなや！」
そのとおり。ボッカンは、エッグマンのおなかに頭をぺたりとくっつけると、ボッカ〜ン！と頭を爆発させたのでした。
「ひぃ〜〜〜！」
エッグマンは、まっ黒コゲ。まるで、温泉タマゴのようになってしまいました。
そして、ボッカンは、頭をフラフラさせながら、次のターゲットを探して歩きだしています。
でも、このメカを止めるには、たったひとつの方法がありました。
「だなや。ドライバー・ガン！」
オムレッツが、腰につけたドライバー・ガンをうちました。
ブルルルル〜ン！
銃から、勢いよくドライバーが飛び出し、みごとにボッカンに命中。あっという間に、ボッカンをバラバラに解体してしまいました。
さてさて、この恐ろしいドクターとオムレッツのコンビ、いったい平和なヘッジホッグ・タウンで何をしようとしているのでしょう。
とにかく、次の日の朝！
ニッキたちは、おもしろ〜いおまわりさんが、交通整理をしているのに出くわすことになるのです。
そして、そのおまわりさんこそ！
なんとなんと！　このドクター・エッグマンの、「変装オオォ！」した姿なのでした。

つづく

●「ソニックの大冒険」の感想・イラストを送ってね！（あて先）〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2の3の1 小学館「小四ソニック⑩」係